

現代宗教(年刊)

東京堂出版 A5判 定価2310円

2001 【特集】二一世紀の宗教

対談●ポストモダン社会と仏教◆星野英紀×大村英昭 / 対談●現代宗教と女性◆野村文子×川橋範子 / エッセイ●神道神学の可能性◆上田賢治 / エッセイ●死を受け入れる生き方◆脇本平也 / インタビュー●日本のペンテコステ運動…弓山喜代馬師に聞く

論文●地域に根ざした宗教は可能か?◆島蘭進 / ●宗教・宗教性・霊性◆伊藤雅之 / ●チベットの活仏と中国の宗教政策◆広池真一 / ●ユダヤ教と原理主義の未来◆臼杵陽 / ●新世紀の宗教◆手戸聖伸 / ●仏教教団と葬祭儀礼◆佐々木宏幹 / ●宗教における暴力と平和◆堀江宗正 / ●イギリスの新宗教と社会◆稲場圭信 / ●統計に現れた日本人の宗教性の現実◆石井研士 / ●宗教運動への研究視座◆大谷栄一 / ●2000年の宗教動向〈国内〉前川理子〈海外〉井上まどか

2002 【特集】宗教・スピリチュアリティ・暴力

対談●日本人の霊性と現代◆鎌田東二×町田宗鳳 / 対談●越境を生きる◆金 繰×黒木雅子 / エッセイ●オウム事件以後の日本宗教◆山折哲雄 / エッセイ●私の宗教観◆田丸徳善 / インタビュー●「地球交響曲」と霊性…龍村仁監督に聞く

論文●宗教と暴力◆芦田徹郎 / ●現代イスラームと女性◆塩尻和子 / ●「イスラームの共存」の可能性と限界◆池内恵 / ●アメリカン・ナショナリズムと宗教◆立田由起江 / ●慰霊と暴力◆西村明 / ●現代フランスのスピリチュアリティ◆榎尾直樹 / ●現代沖縄にみる霊性◆佐藤社広 / ●スピリチュアル・ケアと宗教◆薄井篤子 / ●神社神道と社会福祉◆櫻井治男 / ●警戒される「宗教」と維持される「宗教性」◆井上順孝 / ●丸山真男と宗教史◆遠藤潤 / ●現代宗教社会学の論争についてのノート◆小池靖 / ●2001年の宗教動向〈国内〉前川理子〈海外〉井上まどか

2003 【特集】宗教・いのち・医療

鼎談●生命倫理の最前線◆波平恵美子×柘植あづみ×小松加代子 / 対談●宗教と生命倫理◆ホアン・マシア×伊藤道哉 / エッセイ●「いのち」と「生命」◆村上陽一郎

論文●いのちの始まりをめぐる欲望と倫理と宗教◆棚島次郎 / ●二つの「いのち」という戦略と陥穽◆池澤優 / ●現代の医療とスピリチュアリティ◆安藤泰至 / ●人工生殖時代の朝鮮儒教◆淵上恭子 / ●現代社会における胎児の生命観◆星野智子 / ●臓器移植と現代の神話◆渡辺和子 / ●「生きる力」のユートピア◆山中弘 / ●現代医療における「心」と宗教◆石川都 / ●病院のチャプレンとスピリチュアリティ◆古澤有峰 / ●2002年の宗教動向〈国内〉前川理子〈海外〉井上まどか

2004 【特集】死の現在

対談●現代人と死◆五木寛之×田口ランディ / 対談●墓の語る〈現代の死〉◆鈴木岩弓×井上治代 / エッセイ●死の重み、生の重み◆松本滋 / エッセイ●祀られる死と抹殺される死

論文●死の現状◆カール・ベッカー / ●スピリチュアル・ケアの可能性◆沖永隆子 / ●学校教育における「死」◆岩田文昭 / ●葬送習俗の変化◆新谷尚紀 / ●行き場を失った枕飯◆関沢まゆみ / ●揺らぎ始めたのか葬祭◆菅原壽清 / ●生をはさむ二つの死◆八木久美子 / ●2003年の宗教動向〈国内〉辻村志のぶ〈海外〉井上まどか

特集 宗教復興の潮流

ポーランドにおける社会主義政権の「終焉のはじまり」 ——カトリック教会をめぐる政治性の問題——

加藤久子
かとう ひさこ

一、はじめに

国民の九五%がカトリック教会に属するポーランドにおいて、教会は社会生活におけるさまざまなレベルで、強い影響力を持っている。また、そればかりでなく、国家や社会の側からも、常に、政治的・社会的役割を求められ、働きかけられる存在であると言える。このような教会と社会・国家の関係については、従来、他国との比較の中で、ポーランドをポーランドたらしめる特徴とみなされ、その理由として、主に歴史的背景が論拠として挙げられて来た。つまり、一世紀以上続いた三国分割の時期や、第二次世界大戦中のナチス占領下で、カトリッ

ク教会が「ポーランド国家」にかかわって「民族」のシンボルとして高い正統性を享受するようになり、社会主義政権下での反教會的な政策によって、その傾向がさらに強まった、というのが一般的な理解と言えるだろう。

一九七八年にポーランド人教皇が誕生して以来、特にその傾向は強まり、教皇の「祖国巡礼」に国を挙げて熱狂し、民主化運動の一大勢力である「連帯」の集会に十字架やマリア像がシンボルとして掲げられる姿などが記録された。さまざまな形で、教会や宗教に対してこのような政治的な意味づけが行われ、教会の側もその熱烈な支持の恩恵を享受していたと言える。そのような傾向は民主化後も続き、公立小学校で宗教(カテキズム)の授

業が行われ、宗教的行事にナショナルな表象が取り込まれるなど、ポーランドに特徴的な現象であると言える。日常的にも、都市部では、毎日曜日、ミサが各教会で早朝から深夜まで一〇回程度繰り返され、大聖堂の椅子に座れない人が通路に立っているばかりか、教会の外にまで溢れている状態であり、時に「熱狂」を伴う、極めて実践的な信仰の形態が観察されると言うことが出来るだろう。

主に一九八〇年代以降、このようなポーランドの教会の姿は、様々なレベルでの言説において紹介され、また、東欧各国の比較研究においても強調されて来た。このような理解は一定の成果を挙げたと言える。というのも、「東欧」というカテゴリーは非常に政治的な概念であり、言語・宗教・地勢などは、国や地域によって多様である。「社会主義」という枠組から解放され、その多様性に着目されることによって、旧東欧圏の諸国家についての理解は進んだと言える。と同時に、このような国家と教会の関係が「ポーランドの特殊性」という言葉で説明されることで、いつてみれば括弧に入れられ、その実態や、

理論的な枠組の中での位置づけについては精査されてこなかった傾向がある。

また、このような信仰形態や、その国家や社会との結びつきの強さが強調される一方で、一九八九年のいわゆる「民主化」以降、教会の権威は低下したとも言われて来た。特に、聖職者による政治的な発言に対する批判は強い。また、若者や知識人などを中心に、「自分にとって、カトリックの信仰は大事なもののだが、教会には不満がある」という発言が多く聞かれるようになった。もっとも、この場合の「教会」という語は、教会の権力性の問題、特定の神父による政治的発言への反感、金銭に関する不祥事・性的スキャンダルに対する批判、他宗教・他宗派や同性愛者など「他者」への不寛容、女性の叙階に関する問題など、多くの論点を含んでシンボライズされた、やや抽象的なものだとも考えられる。また、このような教会批判は、ポーランドに限らず、どこの国でも言われていることであり、カトリック教会が今日課題として抱えている問題とも言えよう。

しかし、カトリック系の雑誌ZNANKの編集長である

ゴヴィン³は、ポーランドにおける教会の権威低下を、一般に言われるような「世俗化プロセスの影響や、一般的な宗教離れとしては説明出来ない」とし、その論拠として、このような批判が信仰に対する「無関心」層の増加を伴わず、自己を「信者である」と同定する者のパーセンテージにも変化が見られないことを挙げる。また、軍隊や警察に対する信頼は低下していないことから、「困難な転換期において、社会にかかわる権威全般の危機の兆候として扱うことは出来ない」とも説明する。

筆者は、むしろ、このような批判の出現は、いわば「理性化」であり、体制末期から転換期にかけての熱狂的な教会支持の姿の方が、いつてみれば「特殊」な状況であったと考えている。スロヴェニアの知識人であるジジェクは、体制変動のプロセスについて、

以前の共産党員が権力に返り咲いたことが、人々の資本主義にたいする失望や旧い社会主義的安定への郷愁が理由であるなどと主張することは誤っている。そうではなく、ヘーゲル的な「否定の否定」を

ある種もじつて言えば、社会主義は、事実上、以前の共産党員の返り咲きによってのみ、否定されたのである。すなわち政治分析者たちが「資本主義への失望」と理解（誤解）していることは、実質的には「規範的（正常）」な資本主義に望むべくもないことに活路を求めた倫理・政治的な熱望が裏切られたことへの失望なのだ。

と説明するが、教会についても同じように考えることが出来るだろう。

したがって、むしろ、ここで問題にすべきは、そのような批判の噴出にもかかわらず、なぜ、ポーランドにおいては、未だに教会はかくも国家や社会と密接に結びつき、かくも実践的な信仰形態が見られるのかという点である。

このような問題を、「歴史性」という「特殊性」の枠に閉じ込めてしまうことなく説明するために、一つの手がかりとなり得るのは、宗教における「政治性」の問題である。権威主義体制下において、カトリック教会が社